

平成 27 年度「インクルーシブ教育システム構築モデル事業(学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進)」
成果報告書

団体名	筑波大学
-----	------

I 概要

1 事業の概要

1. 本事業の目的

本事業は、筑波大学附属大塚特別支援学校高等部生徒と、筑波大学附属坂戸高等学校生徒がアダプテッドスポーツを通じた交流を軸としたオリンピック・パラリンピック教育に共に取り組むことで、障害のある生徒と障害のない生徒が自己理解や他者理解・相互理解を深め、対等の立場で考え、楽しみあうことができるような仲間となりうる学びの場、交流の場を作り上げることを目的とする。

2. 事業の概要

- ①毎年実施されながら単発の行事になりがちな附属学校間の交流学习を、年度内に継続的に実施する。また、各校でオリンピック・パラリンピアンを招き、交流学习を実施する。
- ②異文化、異年齢、ノンバーバルな交流を可能にする「スポーツ」や「遊び」を軸にした交流を繰り返し経験する中で、相互理解を深め、「相手の良さ」を知り、「お互いを思いやり、尊重し合う、共生社会」に必要なことを考えあうことができるような学びの場、交流の場を作っていく（生徒主導を目指す）。その中で、既存のスポーツに限らず、対等の立場で楽しみ合える新たなアダプテッドスポーツを学習活動の一環として、生徒と共に考案していく。
- ③学習の成果を生徒達自身が研究成果としてまとめ、生徒同士の研究成果報告会を実施する。
- ④事業の成果は報告書としてまとめ、特別支援学校や総合学科設置高等学校などへ発信する。

2 事業の成果

1) 成果

(1) 交流の手段としてのアダプテッドスポーツ（身体活動）の有効性

「アダプテッドスポーツ（身体活動）はお互いが遠慮すること無く、対等の立場で楽しみ合える交流を可能にする手段となり得る」という仮説のもと、交流を行ってきた。

大塚特別支援学校とアスリートとの交流では、アスリートの“すごさ”を実感すると同時に、一緒に活動を楽しむことや、模擬競技を体験することで「あこがれのアスリート」を「身近なアスリート」として感じる事ができた。

附属坂戸高校と大塚特別支援学校との交流では、最初の交流で行ったレクリエーションの「赤白オセロ」の経験が、後に坂戸高校生が考案し交流会で一緒に取り組んだアダプテッドスポーツを選択したり、ルールを考案したりするきっかけになった。このレクリエーションで緊張がほぐれたのか翌日の交流会では、お互い声を掛け合いながらスポーツを楽しむ様子が見られた。事後のアンケートでは、「一緒にスポーツを楽しむことができた」、「どのように関われば良いのか分からなかったが、（苦手なことがあっても）同じことが分かって安心した」などの意見が挙げられた。

8月以降、10月、11月、2月の交流会では、大塚生徒は坂戸高生とのスポーツ交流を心待ちにしており、また、坂戸高生も11月に大塚生徒が考案したスポーツに取り組むことを楽しみにしている様子がアンケート等から窺われた。また、坂戸高校の研究大会では、「体育を科学する」を専攻した生徒から、スポーツの価値を再考した結果として「スポーツは言語を超越した究極のコミュニケーションツールである。」という意見が発表される等アダプテッドスポーツを通じた交流は一定の成果を得ることができたと言えよう。

(2) 交流を深めることができた

附属大塚特別支援学校は11月までの学習において、鈴木選手との交流を長短あわせ、のべ4回行うことができた。鈴木選手がけがをした際に生徒達からお見舞いの手紙を書きたいと希望が出るなど、交流を行ったアスリートを身近な存在として大切に感じていることが分かる。

大塚生徒、坂戸高生徒はのべ4回交流を実施した。どちらの交流会も数を重ねるだけでなく、内容を少しずつ変化・発展させながら行うことで、「交流会のその場」だけで終わらない交流をすることができた。

附属坂戸高生徒も、附属大塚特別支援学校の文化祭に「大塚の生徒とかわした約束を守るため」に来校する、青年学級の「成人を祝う会」で再会した高等部生徒へ自然と近づいて笑顔で話をする、アンケートの自由記述に「怖いと思って避けてしまった。次は自分から関わるようにしたい。」と回答した生徒が次の交流会で積極的に関わっていくといった様子もみられた。「大塚生徒のことがだんだんと分かってきた。自分から話し掛けることもできたし、名前を呼んでもらえて嬉しかった。」という回答があるなど、「その場を楽しむだけでなく、相手を思いやる様子」もみられるようになった。

附属坂戸高校の研究大会では、介護福祉基礎を選択した生徒から、「障害は個性であると思えるようになった」、「自分たちにはない良さを沢山もっている」「大塚の生徒達を『支えるべき存在』から、『補い合う仲間』と感じるようになった」といった意見が挙げられた。年度内に繰り返し交流を行った結果深まった相互理解の成果であると考えられる。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

(1) より良い関わりを引き出すために必要なこと

より良い関わりには、「質」と「量」の視点がある。「質」とは教員が介在しない生徒主体の関わりであるか、また、「量」とは一回の交流会でなるべく沢山関わり合う機会を設けることができているかということである。特に、附属坂戸高校と附属大塚特別支援学校の交流会においては、生徒主体の関わりを沢山引き出したいため、交流時に教員からの支援や働きかけを極力行わないようにした。そのため、関わりをもつことが難しい障害が重い生徒（自発語が無い、嫌なことがあると靴や靴下を脱いでしまう、無理な誘い方をすると他害をしてしまう、ルールの理解が難しいなど）に対して、『仲間・友だちとしての関わり』ではなく、『支援者のようにサポートをする関わり』になってしまうことがあった。

今後、『質量共により良い関わりを引き出していくため』、『安全で楽しい交流を行うために、どの部分を教員が行い、どの部分を生徒同士に任せるのか』、また、『生徒同士が考え、自主的、積極的な関わりがある交流にするため』に必要な支援の条件を事前に確認すると共に、現場でどのように見極めていくのが課題である。

(2) 交流会の運営

交流会の運営に置ける課題は2点ある。1つは教員の責任で行う運営で、日程決め、場所決め、内容決めがこれに当たる。交流を行うどちらかに過重な負担が偏らないように進めていくための調整が難しかった。学校種（教育課程の特色）の違い、所在地が遠い（移動に時間がかかるため短時間の実施が難しい）、本交流事業が7月からスタートしたことが、日程調整に時間がかかった理由である。充実した交流を、負担を感じることなく継続していくために前年度中に年間計画をたて、お互い全校へ周知することが必要である。

もう1つの生徒が行う運営には、「交流会をなるべく生徒同士で進める」という課題がある。今回の交流を行うに当たり、附属大塚特別支援学校の教員が附属坂戸高校の生徒に対して「学校理解」「障害理解の」事前授業を行っている。受講した坂戸高生徒に実施したアンケートから事前授業の必要性と成果は高いことが分かったが、実際の交流場面では、教員の介在無しではなかなか親睦が深まらない様子が見られた。アダプテッドスポーツを行う時も、実施する種目が一般的なものではないため（対象者を想定してルールや道具を変えているため）、お互いが理解できるような説明や、スムーズな進行をすることが難しかった。アダプテッドスポーツという教材の開発を進めると共に、お互いがルールを理解し、ゲームを楽しむための方略を蓄積していくことが必要である。

(3) 正しい情報の発信

附属坂戸高校生徒の発表の中では、「メディアからの情報」や「周りの大人たちの、障害のある人に対する態度や振る舞い」が、生徒達の中に障害のある方々への誤解や偏見をうんでいることが挙げられていた。今後は我々大人たちが、正しい情報や学びの場を提供すると共に、将来の共生社会を担う生徒たちにとってのロールモデルとしての振る舞いを身につける必要もあるだろう。心のバリアフリー社会の実現に向けて実践を積み上げていきたい。